# ④ 人が持ちこんだ生き物 … 外来種

河川敷一面に広がるセイヨウタンポポ（札内川・帯広川合流点：帯広市）。右下はニジマス。どちらももとは日本にいなかった外来種。

わたしたちが食べる、ごはんの米、白菜や大根などの野菜、牛乳や肉を与えてくれる牛などの家畜。これらは、ほとんどが外来種（外国からやって来た生き物）です。育てて楽しむ草花やペットの多くも外来種です。

こうした外来種の中に、十勝の自然の中へ広がっていったものがあります。人が放した場合もあります。

例えば、河川敷の公園などでよく見られるタンポポは、ほとんどが外来種のセイヨウタンポポです。もとから十勝にあったエゾタンポポは数が少なく、なかなか見られません。

また、ニジマスももとはアメリカから移入された外来種です。放流されたあと、十勝の自然の川で卵を産みながら、生き続けているのです。

（左）エゾタンポポ。（右）セイヨウタンポポ。わかりやすいちがいは、花のウラの「がく片」がそりかえっているかどうか。

## 暮らしから広がる外来種

わたしたちの生活が、外来種によって成り立っているところもあるので、ある程度外来種が広がることは、しかたがないかも知れません。

また、セイヨウタンポポのように、河川敷の公園など人が手を入れた場所で、たくましく育ち、風景をいろどってくれるものもあります（セイヨウタンポポは強い草花ですが、エゾタンポポを減らしているわけではありません）。

でも、種類によっては、もともと地元にいた生き物を減らしてしまい、自然のバランスをこわす生き物もいます。

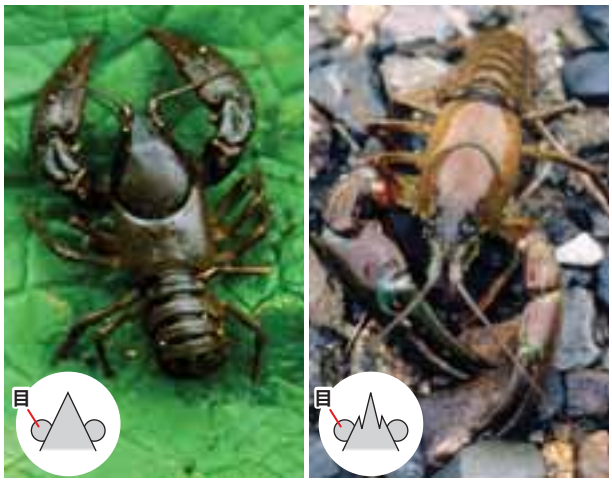
## ウチダザリガニの問題

十勝には、もともとニホンザリガニしかいませんでした。ニホンザリガニは、温度が低くきれいな水にすんでいます。開発が進むにつれ、こうした場所が少なくなり、かなり数が少なくなっていました。

そこへ、外来種であるウチダザリガニが広がり、ニホンザリガニをさらにおびやかしています。

ウチダザリガニは、ニホンザリガニと同じようなところに暮らします。大きくなるとニホンザリガニの２倍近くになり、ニホンザリガニを食べてしまいます。さらに、ニホンザリガニがかかると死んでしまう病気[※1]を広げるようなのです。

これ以上、自然の中にウチダザリガニを増やさないようにしなければなりません。そのため、法律[※2]で、川や池など外に放してはいけないことになっています。




（左）ニホンザリガニ。（右）ウチダザリガニ。どちらも冷たい水を好む。見分け方は、目と目の間の頭の先がギザギザになっているかどうか。

※１　病気（びょうき）：ミズカビ病。

※２　法律（ほうりつ）：ウチダザリガニは「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（平成 16 年法律第 78 号）」に基づいて指定される「特定外来生物」であり、生かしたたまま移動したり放したりしてはいけない。